

遠い日の光と影

三ツ野豊
みつのゆたか

六月の札幌は樹々の新芽が黄緑色に吹き出し、夏の緑とは違った爽やかな彩を春の空に映し出していた。

売り出されたばかりの住宅地には、まだまばらにしか家は建っていないかった。その下宿先の家に五年生のお

れていた犬が吠え出す。すると彼女は、「藤姫ダメー！」

その樹々の枝を吹き抜ける風が西岡の新しい学び舎にも届いて、胸を膨らませて集まる若者たちの晴れやかな頬にそよいでいた。遠い私の記憶の底から、そんな情景が今も甦ってくる。

ませな娘がいた。その子は日曜の朝になると寝坊の私を教会の礼拝に連れていこうと、窓の下から大きな声で名前を呼んで起こしたのだ。

と、当時にしては風変わりな名前を何度も言つて諫めるのだが、犬は一向に吠え止まない。しかも私の起きる気配も全くない。礼拝の時間が迫り、とうとう諦めた娘は込み上げてくるものを堪えながら一人教会へ走るのだ。

私が下宿していた民家は大学から歩いて十五分くらいの所にあつて、

「みつつのさーん！ みつつのさーん！」
その声に呼応して、その家で飼わ

るとはいえ一度だけ、私は意を決し

て早起きして、その子と手を繋いで教会へ行ったことがあった。その道々、私が何も知らないで、彼女は礼拝の手順についてまるで自分の息子にでも教えるように、少しだけ誇らしげに、けれども少し照れくさそうに、溢れんばかりの母性を発揮して教えてくれるのだった。

まだ若かった私はその姿に心奪われ、女という生き物には、きつと生まれたときから女神が宿っているに違いない、と思ったものだった。

今となつては知る由もないが、彼女はその後どんな青春を迎え、どんな男と巡り合い、どんな人生を歩んだのだろうか。

私は当時激しさを増していた安保闘争などの事情で、僅か半年でその下宿を出た。そしてその一年後、

私と仲間だった親友はデモに出て、

当時札幌駅の横にあった陸橋で機動隊と対峙し、何度も衝突した。そして最後の衝突のとき、私は逃げおおせたものの、彼は深入りしすぎて機動隊に囲まれ逮捕された。そして裁判闘争が始まり、拘置所と裁判所を連れ回されながら、彼の心は千々に引き裂かれていった。

その数ヵ月後、私は東京の代々木公園から出た十万人のデモに加わり、そのデモ隊に潜り込んでいた私服警官に逮捕された。石神井署の留置所で、私は二十四日間黙秘を続けた。そして拘留期限ぎりぎりに、名前と住所だけ言い、不起訴処分となつて留置所から出た。

大学へ戻ると、仲間たちはその大半がガールフレンドを作つて青春を

謳歌していた。そしてその後間もなく、

日本を揺るがした七十年安保闘争は既存の体制を打倒することなく終結した。セクトの残党は互いにリンチを繰り返し、私は嫌気がさして運動から離れた。多くの者が心に深い傷を負った。命を絶つた者も少なくない。

西岡で輝いていたあの遠い光は、今はどこを飛び交っているのだろうか。札大のキャンパスを吹いていたあの黄色の風は、今はどこを吹き抜けているのだろうか。あの時代、あの大学で、共に生きた若者たちは、自分の青春の一ページに何を書き残したのだろうか。